

平成27年度  
横山利弘先生を囲む道徳教育東京勉強会（報告）

府中市立府中第三中学校長

森岡 耕平

第1回勉強会 4月11日（土）参加者38人

<課題> 読み物資料「虎」を活用した授業づくり

<内容> 自己紹介 資料分析 指導・助言

- ・劇的な展開のある資料などで、「この続きはどうなっていると思う？実はね…」と、分断して扱うことは、主人公になりきって考える流れを分断し、資料から離れることになる。それは考えようとする道徳的価値からも離れることになると共に、奇をてらうしかけともなり、生徒の心に落ちない流れを生みかねない。
- ・資料「虎」から個性とは何かを考える。「個性の伸長」とは良いことを伸ばすという意味ではあるが、「あの、個性的だよな」などという場合、人と違うことを否定的に捉えた見方として「個性」が受け止められる。日本人の考え方、伝統的な文化に個性が縛られる要素がある。そのことを捉えながら、資料「虎」の深井八輔の変化を追いたい。役者として脚光を浴びたい思い、虎に扮する自分を悲しくさえ思う中から、その虎になりきり、夢中で演じる姿そして喝采、「いいようなない快感のみが存在した」と、その変化を考えさせたい資料である。

第2回勉強会 6月13日（土）参加者35名

<課題> 読み物資料「左手」を活用した授業づくり

<内容> 自己紹介 資料分析 指導・助言

- ・小児麻痺という恐ろしい病魔との闘いの中で、言葉では表せないほどの苦しい道を歩み続けた主人公の思いを考える。
- ・母の励まし、家族の支えの中で運命に立ち向かい、左手を頼りに目標を立て、挑む姿、その強さに思いを寄せ、大きな喜びにつなげた主人公の姿に学ぶ。

第3回勉強会 8月29日（土）参加者49名

<課題> 読み物資料「海と空―樫野の人々―」を活用した授業づくり

<内容> 自己紹介 資料分析 指導・助言

- ・道徳の教材について、時代背景（時）や地理的背景（場所）が今、子供たちが生きている状況から異なっていたとしても、人間の行為を考えることはできる。古くからある資料でもおおいに活用できる。
- ・小学校6年生との対話から、いじめについて「君らは知っているはず。なぜ止めないの？」と問うと、「勇気がないから」と答えた。そこで、「勇気って何？」と聞いてみたら「正面から向きあうこと」と返ってきた。では「勇気は何から生まれるのだろうか…。」「それは、愛から生まれるものだ。」子供たちはよくわかっている。

- ・榎野の人々とトルコの人々、その関わりの中で何を考えるか。
- ・国際人とはどんな人なのか。国際理解とはどんなことを理解することなのか。
- ・互いの異なることを理解することが国際理解なのか。違いを見ようとするより、どことどこが同じなのかを見ることで普遍的なものが見てくる。

第4回勉強会 10月17日(土) 参加者49人

<課題> 読み物資料「ミスターヌードル―安藤百福―」

<内容> 自己紹介 資料分析 指導・助言

- ・「真実」と「事実」について考える。「事実」を並べても「真実」にはならない。
- ・「夢」と「理想」について考える。実現に向かっているものが「夢」である。
- ・安藤百福によるインスタントラーメン開発の資料。開発を支えた動機、試行錯誤、失敗を繰り返しながら、少しずつ前に進む挑戦を支えたものを考える。

第5回勉強会 12月19日(土) 参加者52人

<課題> 講義「道徳科への流れの中で」

<内容> 自己紹介 指導・助言

○文科省調査官 澤田先生より

「五郎治殿御始末」(浅田次郎著)から、『子供は何でも知っている。知らないフリをしている。知らないふりをしなくなった時が大人になった時』 道徳性の確立は幼児期。

○横山先生より

・道徳科に向けて、ここまでの急速な流れに対して、文科省は今、多様な実践についての提案を集めたいという要望があるようだ。

- ・「気が付く」子供を増やすこと。

教卓に一輪の花を置く。それに気づかなければ、翌日はもう一輪の花を置く。気づいたら、「これ高いんだぞ。何で昨日気付かなかったの」ではなく、「よく気付いたね。」とほめる。気づいたことをほめることで、気付く子に育つ。意識が内向き子を外向き子にする。気づくことはその子のやさしさ、思いやりにつながる。

- ・「主体的、協働的な学び」(アクティブラーニング)はもともと大学の学びを変えるために必要とされた。自らの問題として生き方を考える学びのこと。
- ・資料の活用と多様な取組について

例 「二通の手紙」 → 「入園させる」か「させない」のディベート

このディベートは、事情があればルールを破ってもいいと考える子を増やしてしまう危険性が高い。ディベートをする場合は、もともと価値が収斂される従来の資料を活用するのではなく、モラルジレンマ資料等で扱う

<従来とは違う指導・教材として考えられるもの多様な教材・多様践>

- 1、1つの価値に収斂する資料(価値の自覚)
- 2、2つ以上の価値の対立を止揚する資料(止揚=解放させる価値)

- 3、動機論・結果論、心情倫理・責任倫理の対立  
純粋な動機が行っていることが、迷惑な行為になっている
- 4、生き方を考えることができる教材（生き方＝行為の選択）  
判断の連続。そこでどう価値を引きつけるか
- 5、予期することのできない困難との出会いを乗り越えてきた話  
自然観の違い、西欧＝自然は克服しなければならないもの
- 6、合意形成（どちらにも不満が残る最高の決着）

第6回勉強会 2月20日（土）参加者51人

<課題> 読み物資料「真の国際人―嘉納治五郎―」の分析と活用

<内容> 自己紹介 資料分析 指導・助言

- ・偉人の資料には必ず強い意志がある。困難に打ち勝つ、愛国心もベースにある強い意志を通して実現したかった価値は何かを考えること
- ・この資料の行為はオリンピックの招致である。その根にある道徳的な価値は何かを考えると内容項目の取り違えがなくなる。
- ・国際理解とはそもそも何か考える必要がある。違いを見つけようとするくせが日本にある「違いをみようとするよりも、共通のものをみないと本当の違いは見えない」（ボルノー先生の言葉）
- ・導入から考えるのは得策ではない。下手な人ほど導入が長い。
- ・実感できる道徳、子どもに落ちる道徳にするには、国際理解を観念的に理解しているだけでは伝わらない。自分の言葉で語れるものがないと伝わらない。知的には分かることを超えていくこと、難しさはそこにある。
- ・現代的な課題や問題解決型の授業について道徳の授業として扱うことについての注意点等のお話がありました。

<今年度の勉強会を振り返って>

教科化への道筋が示された中で、その準備をどのように進めたらよいか、多くの学校で課題としている。とりわけこれからの道徳科の授業づくりはどうしたらよいか、これまでの方法をどう変えるべきなのか、勉強会の大きなテーマとなっている。

その課題に向けて、読み物資料の活用とその授業づくりを中心に年間6回の勉強会を重ねてきた。「考え、議論する道徳」が子どもたちの道徳性の育成につながるように教材の発掘、開発、指導方法の工夫に取り組み、勉強会を進めてきた。

参加者も毎回50人を超えるようになり、東京だけでなく各地からの参加者も増え、本勉強会への多様な要望も寄せられている。今後も活動の継続、向上を図り進めていきたい。